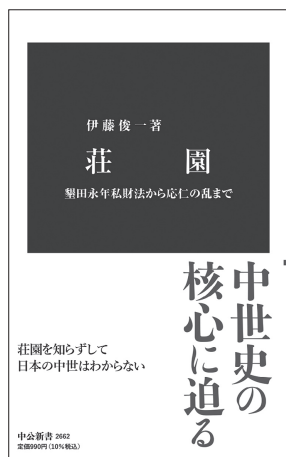


伊藤 俊一 著

荘園

——墾田永年私財法から応仁の乱まで

紹介者 高橋 典幸



中央公論新社

2021年9月

新書判

304ページ

本体 900円

目次

はじめに

第一章 律令制と初期荘園

第二章 摂関政治と免田型荘園

第三章 中世の胎動

第四章 院政と領域型荘園

第五章 武家政権と荘園制

第六章 中世荘園の世界

第七章 鎌倉後期の転換

第八章 南北朝・室町時代の荘園制

第九章 荘園制の動揺と解体

終章 日本の荘園とは何だったのか

あとがき

荘園ないし荘園制は日本史の中でも古くから研究が進められた分野の1つであり、現在もなお新しい研究成果が積み重ねられているが、高校の授業などでは教えるにいとまされている。こうした状況に対して1つの導きの糸になるのが本書である。

本書の魅力は様々あるが、もっとも重要なのは荘園の歴史を描き切ったことである。荘園は8世紀半ばの墾田永年私財法の発令による初期荘園の設立から始まり、戦国時代に終焉を迎えるが、この間、実に750年を数える。一口に「荘園」といっても、これだけの長期にわたって一定不変のものであったわけではない。おそらくこのあたりに荘園を説明する際の難しさがあると思われるが、本書では750年におよぶ荘園の歴史が一貫して叙述され、荘園の変容が丁寧に説明されている。

なかでも注目されるのはつぎの2つの画期である。1つは院政期の領域型荘園の設立である。それまでの荘園は国衙から税の減免を受けた耕地(免田)の集積体にすぎなかったが、領域型荘園の設立によって、地方の独立した小世界が中央に直結する経済システムが誕生したという。中世が「荘園制の時代」とされるゆえんである。

もう1つの画期は鎌倉時代後半から南北朝期である。それまでの荘園では、貴族や寺社が本家や領家に、武士が地頭や下司の地位にあり、重層的な関係が結ばれていたが(職の体系)、下地中分や南北朝内乱の結果、その重層性が解体し(職の一円化)、貴族・寺社・武士が室町幕府の下で京都に集住する横並びの領主として地方を支配する体制として荘園制が再編されたという。従来、南北朝以降は名^{みょう}など荘園制的な徴税システムは存続する一方で、荘園制そのものは衰退・解体するとみなされてきたが、本書により、荘園制は変容しながらも中世を通じて存続することが明らかにされたのである。

荘園の歴史を縦軸とすれば、横軸、すなわち荘園に暮らす人々の動きや、代銭納など荘園をめぐる経済の動き、さらには荘園の存立に関わる政治の動きなどについてもしっかりと書き込まれている。荘園が中世の社会に占めた位置の大きさ、荘園制の広がりが見え、再認識されよう。また著者も参加された古気候変動研究の最新の成果が随所に盛り込まれていることにも注意したい。近年の歴史学では私たちの先祖の営みだけでなく、人間と自然環境との関係にも注目が集まっている。荘園研究はその最前線でもあるのである。

(たかはし・のりゆき／東京大学大学院人文社会系研究科教授)

筒井 清忠 編

『昭和史講義』 シリーズ

紹介者 鈴木 淳

『昭和史講義——最新研究で見る戦争への道』	
『昭和史講義 2——専門研究者が見る戦争への道』	
『昭和史講義 3——リーダーを通して見る戦争への道』	
『昭和史講義【軍人篇】』	筑摩書房
『昭和史講義【戦前文化人篇】』	2015年7月～2022年7月
『昭和史講義【戦後篇】(上)』	新書判
『昭和史講義【戦後篇】(下)』	
『昭和史講義【戦後文化篇】(上)』	288～352 ページ
『昭和史講義【戦後文化篇】(下)』	本体 880～1,100 円

筒井清忠編『昭和史講義』は、当初、昭和の初めから占領期までを扱う1冊だけの企画であったが、好評のため2022年まで同じ編者と体裁で続巻され、9冊のシリーズとなった。それぞれに、20分程度で読める「講」が14ないし21おさめられている。

編者が「まえがき」で記しているように、昭和史の研究は史料も課題も多いだけに細分化されており、研究書や論文を読んでもごく狭い範囲の知見しか得られない。一方で、自分の歴史観に基づいて、実証的な研究成果の都合のよいところと思いこみとをつなぎ合わせて書かれた歴史物語は読みやすく、多くの読者を得ている。また、古典的な名著であっても、天皇の関係をはじめ近年の史料の公開による研究の進展で、修正すべき点がある。

このシリーズの特色は、各「講」を、その課題で学術書や論文を書いている現役の研究者が担当し、限られた紙幅にもかかわらず、必ず著者以外によるものも含めた近年の研究状況を示し、研究の進展の背景や意味、おもしろ議論の根拠、そして多くの場合は表題の範囲を越えた前後のつながりも述べて、歴史研究の成果をわかりやすく提示したことである。

1冊目の『昭和史講義——最新研究で見る戦争への道』第13講の最後の部分は、アメリカ側が真珠湾攻撃を事前に察知していたという説の根拠のなさを説いて、実

証研究の意義を示す。研究が進んでも、歴史の解釈が1つにまとまることはない。ある事件の経緯が完全にわかることは稀であるし、わかったとしても、同時代の人々の受け止め方は立場や性格により異なるので、その中の何を重視するか、解釈の相違は残る。一方で、史料に基づく研究を進め、時系列を整理して行くと、ある程度のこととはわかる。ほかの研究者が発表した成果も含めて、それは共有の蓄積となる。歴史学の研究者はそれに基づいて書き、それを無視するのは歴史物語である。歴史物語の方が読んで元気が出るにせよ、教訓を得たり、背景を異にする人々に対話したりするときに必要なのは、歴史学の成果としての歴史である。ロンドン海軍軍縮条約問題の様々な受け止め方を示した第4講、日本側とソ連側、それぞれからみたノモンハン事件を描く第10講などを始め、本書はそのような歴史の多面性と、それを把握しようとする研究者の営為をよく示してくれる。また、各講に、「さらに詳しく知るための参考文献」として主要な研究書などの簡単な解説が付されているのも読者に親切である。講ごとに著者が違うので、続けて読めばよくわかるというわけではない。しかし、1つの講を読み終わると、歴史のある部分がかっきりと浮かび上がり、続けて読みたい講が見つかるであろう。

2冊目は、同じ時期を対象に1冊目を補うべく「軍縮と軍人の社会的地位」「治安維持法」「世界恐慌下の日本」などを扱う『昭和史講義 2——専門研究者が見る戦争への道』で、歴代首相など人に即してこの時期を描く『昭和史講義 3——リーダーを通じて見る戦争への道』がこれに続いた。『昭和史講義【軍人篇】』は、題名通り軍人を扱い、東条英機と米内光政は『昭和史講義 3』とは別の著者によって描かれる。【戦前文化人篇】は首相ともなった石橋湛山から、漫画家の田川水泡^{たがわすいほう}まで幅広く、別の面から戦前期の理解をもたらしてくれる。【戦後篇】は1960年前後を境に2冊にわけられて戦後初期が充実しており、教科書的な歴史理解を豊かなものにしてくれる。【戦後文化篇】(上)は思想・文化を扱って戦後社会の理解を助け、同(下)は映画をはじめサブカルチャーから、時代相や国民の共通の記憶を考える。ここでは編者が映画を扱う3つの講を執筆し、社会の歴史の新たなとらえ方を提示している。各巻の「講」の題目と著者は筑摩書房の「ちくま新書歴史講義シリーズ」ホームページ(「筑摩書房歴史講義シリーズ」で検索)で参照することができる。

(すずき・じゅん／東京大学大学院人文社会系研究科教授)

山崎 正和 著

室町記

紹介者 中家 健



講談社

1985年2月刊
(朝日新聞社より1974年初刊、講談社文芸文庫として2008年刊)

A6判

218ページ

本体 360 円 (講談社文芸文庫版：本体 1,400 円、現在は電子書籍版を販売中：本体 1,150 円)

目次

- 第一章 沸騰するつぼ
- 第二章 乱世を開いた二人の覇者
- 第三章 乱世を彩る脇役群像
- 第四章 奇妙な統治者
- 第五章 乱世が生んだ趣味の構造
- 第六章 一揆と下剋上
- 第七章 乱世の虚実
- 第八章 文化人たち
- 第九章 世界の中の日本
- 第十章 活気ある巨大な実験室

日本文化の底を流れるもの

——室町期の芸術と社交を中心に

近年、中世史を扱った著作が数多く刊行されている。『応仁の乱』『観応の擾乱』『荘園』(いずれも中公新書)などだが、この中世史ブームを生み出したのは、岩波新書の通史シリーズが、2006年の日本近現代史を皮切りに、古代史、近世史と続いて、16年によりやく中世史を刊行したことにあると思う。また、中世が日本史の中でとらえ方が一番曖昧な時期として位置付けられているからともいえるだろう。こうした潮流の中、20年の山崎正和氏逝去の報を耳にして、かつて学生時代に触れた、今となっては古典的ともいえる本を思い出していた。著者は、京都大学大学院で美学美術史学を専攻した評論家・劇作家で、演劇研究家としても名高い。

著者は書き出しに、「『室町期』の二百年ほど、乱れに乱れて、そのくせふしぎに豊饒な文化を産んだ時代はない」と記しており、この『室町記』は前半で政治・社会史を展開し、後半で文化史をおさえ、その最後に「日本文化の底を流れるもの」で結ぶ構成をとっている。

貨幣経済の浸透にともなう商人・土豪ら中間階層の自立を背景に、関東を拠点とした鎌倉幕府や江戸幕府とは異なり、初期の南北朝動乱ゆえに幕府を京都・室町(3代将軍義満より。初代尊氏・2代義詮時代は高倉)に開いたことで「都市文化」(著者は室町期をサロン文化の時代とみている)を成立させ、それが応仁の乱を契機に権力の割拠と文化人の拡散による「地方文化」を生み出したとしている。また、この時代を「海に開かれた時代」として、その交流については経済面だけでなく、情報面・文化面に注目しており、輸入文化との接触が日本人に一種の文化的ナショナリズムを目覚めさせたとも説いている。

終章の「日本文化の底を流れるもの——室町期の芸術と社交を中心に」では、室町期から戦国期を西洋のルネッサンスに例えて、日本的文化の開花期としてとらえるなど、西洋の芸術観との対比がみられる。西洋では芸術的表現が神と個人のあいだで完結し、他人には副次的に伝達されるであるのに対して、日本の場合、芸術はあくまでも自分と他人との人間関係で完結すると、「能」を題材に世阿弥の芸能論を展開させ、「茶の湯」の変遷をもとに、自己表現(背中あわせの自己顕示)への反発が生み出す人間関係の妙が、芸術の中に入り込んで、その性格を強く決定すると解説している。

美学者の目からみた、室町期の文化を核とした時代分析は、日本史探究にも活かせるのではないかと考える。

(なかいえ・たけし／東京都立小石川中等教育学校教諭)

鹿野 政直 著

近代日本思想案内

紹介者 太田尾 智之



岩波書店

1999年5月

A6判

394ページ

本体 1,010円

目次

はじめに——思想と向きあう

- 1 幕末という時代
 - 2 啓蒙思想
 - 3 自由と平等
 - 4 欧化と国粹
 - 5 信仰の革新
 - 6 国体論
 - 7 生存権・人権
 - 8 民本主義と教養主義
 - 9 民俗思想
 - 10 科学思想
 - 11 社会主義
 - 12 フェミニズム
 - 13 反戦論・平和論
 - 14 日記・自伝・随想・書簡
- むすび——戦中から戦後へ
- 付編 言論法規

言 わずもがなのことだが、歴史の授業では各時代・各分野を(程度の差はあれ)まんべんなく扱う。そしてこれも当然のことながら、教員は授業準備として教科書や副教材はもちろん、教授内容に関する書籍を参照しようとする。ところが、政治・経済・外交などの分野についてはコンパクトな概説書が見つけやすいのに対し、思想や文化となると、適した書籍がなかなか見つからない。これまでに発行された日本通史のシリーズ類でも、各時代の思想や文化を充分に取り上げたものは案外少ないと思われる(皆無というわけではない)。こうした事情もあり、「思想史・文化史の指導は難しい」という教員側の感覚が生まれ、「思想史・文化史は苦手」という生徒の実感もまた生まれるのではないだろうか。

本書『近代日本思想案内』は、上述のような悩みを抱く若手の先生方の参考になる1冊だと考える。著者は「はじめに」において思想という概念を広義にとらえることとその意義を述べ、「日本人が思想においてどんな展開を示したか」という主題を軸に近代日本の思想のエッセンスを解説していく。思想家に即した構成はとらず、「大きく幾つかの思想にグループ分け」して人物を位置づけているため、テーマごとの全体像を把握しやすい。また、目次からわかるように、政治思想をはじめとして「生存権・人権」「科学思想」「フェミニズム」などの幅広い分野をカバーしていることも注目される。日本史の教科書でおなじみの人物はもちろん、授業で取り上げられる機会は少ないものの、日本近代史に重要な足跡を残した人々に言及している点も本書の魅力である。巻末には索引が付いているので、授業で取り扱う人物や思想の歴史的位置をすぐに確認することができる。

あえて本書の欠点をあげるなら、目配りが利いている反面、それぞれの思想について深く論じられていないということがあろう。その際は、本書で取り上げられている思想家の著作の中で岩波文庫に収録されているものに「*」マークが付されているので、さらに理解を深めたい場合の手引きとして本書を活用したい。

なお、同著者が中高生向けに本書を再編した感のある『近代国家を構想した思想家たち』『近代社会と格闘した思想家たち』(2冊とも岩波ジュニア新書、2005年)もあるので、こちらは生徒向けにおすすめしたい。

(おたお・ともゆき／東京都国立高等学校教諭)